

半つる性丸莢いんげん

『(仮称)アルハマ(BN-118)』の品種特性および栽培のポイント

雪印種苗(株)
千葉研究農場 橋谷 功志

1.はじめに

当社では既に矮性の『スノークロップネリナ』『ベストクロップキセラ』さらに『同サマーキセラ』等を発表し、丸莢品種として特に関西・中京市場を中心にご好評をいただいております。

一方で、矮性いんげん産地では、収穫作業での長時間かがんだ作業が腰への負担となり、より作業性を楽にできる品種が求められています。また、つる性品種よりさらに曲がり莢が少なく選別・箱詰め作業が容易となる高品質な莢を収穫できる品種への期待も高まっており、これらの要望に沿う新しいタイプのいんげんとして、半つる性の『アルハマ(BN-118)』を発表いたしましたので紹介します。

2.新品種『アルハマ(BN-118)』の品種特性

半つる性（有限伸育性）のすじなしいんげんで、関西・中京市場向きのくびれの出ない高品質な丸莢品種です。

1) 早晩性

開花・収穫始期ともに矮性品種のキ

セラより10日程度、半つる性品種の他社品種より3~4日程度遅く、春播きで播種後70~75日程度で収穫を迎えます。

2) 草姿

初期の生育はやや緩慢ですが、開花期以降は生育が早くなります。つる性品種のような過繁茂にはなりませんが、節間はやや伸びやすく、収穫時期の草丈で2m前後まで伸長します。葉は濃緑でやや小さいです。

3) 莢の特性

くびれ（凸凹）のない濃緑丸莢で、肌が滑らかできれいです。莢長15cm程度で莢幅は8mm前後と、キセラと比べ若干太くなりますが、曲がりが極少なく、莢の品質は極めて良好です。

4) 収量

収穫ピークの上昇がややゆっくりですが、1番花の収穫終わりと2番花の収穫始めが重なり、また2番花の収穫終わりとそれ以降の花の収穫が重なるため、収穫量のムラと収穫作業の一時期への集中が無くなります。また、2番花以降の品

質の低下が少ないので、長期間の収穫が可能です。長期収穫において、キセラより総収量は多くなります。

3.『アルハマ(BN-118)』の適作型と利用方法

1) 適作型

一般的にいんげんは風に弱く、強風に吹かれると、スレ・キズ莢の発生や葉傷みにより減収となります。基本的には各作型において、当品種を使用することは可能ですが、特に促成栽培および半促成栽培のハウスなどを用いた施設栽培に向いています。

●沖縄県全域・鹿児島離島

- ・ハウス促成(無加温)栽培
10月下旬～12月下旬播種→
1月下旬～4月下旬収穫

●西南暖地（上記地域を除く）

- ・ハウス促成(加温)栽培
10月下旬～12月下旬播種→
1月上旬～4月下旬収穫
- ・ハウス半促成(無加温)栽培
2月上旬～3月上旬播種→
4月中旬～6月下旬収穫

●一般地

- ・ハウス半促成(無加温)栽培
3月上旬～4月上旬播種→
5月下旬～7月中旬収穫

●高冷地・北海道

- ・ハウス半促成(無加温)栽培
5月上旬～5月下旬播種→
7月中旬～8月下旬収穫

上記の播種期以外にも、雨よけ・風よけハウスを用いたハウス抑制栽培など、まだ作型拡大の可能性があります。

2) 栽培および利用方法

当品種は半つる性ですので、つるを



BN-118（『アルハマ』の試作系統番号）の莢。対照は弊社現行品種『キセラ』

這わせるためにネットが必要となります。支柱や紐を垂らしただけのつるの誘因では、側枝全てが1本に巻き付いてしまい、草勢維持管理や収穫作業が行い難くなり、結果的に当品種の特性を発揮させることができません。ネットの張り方については、下辺は10～20cmくらい空け、上辺は収穫時に手が届く高さ(180cm前後)にします。また、風でネットが揺れ、いんげんが擦れることを防ぐためにも、たるみが生じないようにピンと張ることも重要です。

矮性品種では、収穫作業での長時間かがんだ作業が腰への負担となっており、この軽減と草勢確保の上で収量増をねらって、ジベレリン処理（茎葉処理）を行っている産地があります。ただし、処理時期や濃度など、条件によって生育が異なってくるため、慎重に検討する必要があります。半つる性である当品種は、このような処理を行わなくても、立体栽培であるため収穫もれが少なく、腰痛からの解放や作業効率の向上が期待できます。また、つる性品種よりさらに曲がり莢が少なく選別・箱詰め作業が容易となる高品質な莢を収穫でき、着果数の増減幅が小さいため、収穫作業の一時期への集中が軽減することが可能な品種です。

4.『アルハマ(BN-118)』の栽培上の注意

1) 草勢確保と草勢維持

作型・品種を問わず、さやいんげんの高品質増収対策のためには、まず第一に草勢を確保することが極めて重要になります。

前述したように、当品種は長期の栽培・収穫において特性を発揮します。長期にわたって収穫するには、草勢を弱らせないよう乾燥や肥料切れに注意しなければなりません。追肥は通常いんげんの吸肥力が急激に高まる着蕾期～開花期初期頃から開始し、その後は定期的に草勢を観察しながら1～2週間間隔で施用していきます。



写真2『アルハマ(BN-118)』の株全景(平成18年8月28日鹿児島県)

また、摘葉も草勢維持のために重要なポイントになります。いんげんの葉は老化するにしたがい、葉肉が厚くなり濃緑化していき、これらの葉はほとんど光合成能力が低下し、莢への養分の転流もおこなわれず、いわゆる不要のものとなっていきます。長期収穫においては1番花から2番花、2番花から3番花といった間隔をできるだけつめて、収穫の切れ目をなくす管理が重要で、そのための摘葉は絶対欠かせない重要な作業です。摘葉をしなければ古い葉に覆われ、新しい葉に十分光が当たらず、結果的には草勢を弱らせる事になるので、摘葉の徹底が必要です。しかし、急激な摘葉は返って草勢を落としてしまうので、定期的な摘葉を心掛けてください。

2) 適期収穫の徹底

長期収穫においては、穫り遅れが草勢を弱める原因の1つとなり、結果的に2番花以降の花芽の分化が遅れて、収穫できない谷間の期間が長くなったり、莢の劣化が目立ち秀品率の低下を招く危険性が高まるので、穫り遅れないよう適期での収穫を徹底する必要があります。

3) 摘芯

当品種には摘芯が必要ですが、基本的にはネット上辺より上に出たつるだ

けを摘芯するようにします。手が届かない高さに莢が着いてしまい、収穫できないことが草勢を弱める原因となってしまいます。

5.おわりに

いんげんは、比較的短期間で温度管理さえ守れば簡単に栽培することができる手軽な作物ですが、収穫から選別および箱詰め作業に多大な労力（一般に矮性品種での作付面積の規模は1人当たり2a程度）を要し、そのため各産地においては生産者の高齢化に伴い、栽培面積は減少傾向にあります。反面、市場単価は比較的良好で、高収益性の作物（粗収入で100～200万円/10a）であり、小面積での栽培品目としてはまだ魅力的な作物の1つです。

今回紹介いたしました『アルハマ(BN-118)』をご利用いただくにあたり、出荷先、作型および作付面積など充分に吟味し、収穫作業の改善・軽減と市場性の高い優品生産、そして収益増大のお役に立てれば幸いです。

また、今後も少しでも産地の要望に合致した品種開発を中心に、お役に立てる栽培技術を含め、取り組んでまいります。